

## 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

12

### ■ 第3章「制御不能」

「腕がちぎれる!」。3月13日未明、福島第1原発3、4号機の中央制御室に向か、復旧班計測制御グループの菅家藤二(33)と横山英治(37)らが重いバッテリーを抱えて建屋内の階段を上っていた。復旧班は、制御室にある3号機の原子炉水位計を復旧させようとしていた。

運んでいたのは約20キロ南の東京電力広野火力発電所が用意した2本バッテリードラム。1個の重さは12・5キロで、全面マスクに防護服姿の菅家と横山はそれぞれ3個を一度に運んでいた。

菅家は制御室前で違和感を覚えた。何の音もしない。運転員たちの

会話を、空調の音すらも。だが足を踏み入れると、室内から声が上がった。

### 命綱のバッテリー



▲ 機器の復旧に使われたバッテリ  
ー  
原発1号機（東京電力提供）

「来てくれた!」

3、4号機制御室の主任高宮一美子(39)だった。2人はかつて同じ独身寮で、よく酒を酌み交わした。家族を避難させてから制御室に駆け付けて作業管理グループの富田敏之(54)もいた。

高宮が振り返る。「当時は、2号機が優先で、3、4号機は後回しになっていた」という意識が強かった。菅家さんたちが来てくれて、ようやくこちらにも目を向けてくれる

2011年3月、福島第1

ようになつた、「僕はそう感じました」と、菅家は免震重要棟内の作業員に2本のバッテリー12個を連結する。掛けた。SR弁は120キロの電圧で

菅家と横山はラジオペンチでケーブルの銅線を出し、バッテリーの端が10個必要だった。

だが、もしも避難することになつたら、みんなの足を奪うことになる

時折、暗闇に大きな火が散つたのではないか。菅家にはためらいもあつた。

ループで留めようとするが、ゴム手袋にテープがくっついて、なかなかうまくいかない。

横山はこの後、計器や装置の復旧にあたる。「3号機を（爆発した）1号機のため、何度も何度も制御室に足を運んだ。「1号機の爆発で若い子は供をお願いしました。申し訳なかつたですけど、集まつた時は本当にう

言えないんで、まずは自分が行く姿を見せよう」と

13日朝、3号機原子炉圧力容器が通信 国分伸矢

（敬称略。年齢、肩書は当時。共同